泉穂のいまどき恋愛講座

友達が"丸岡泉穂の7不思議"として指摘することの一つに、私が昔の恋人たちと今や大親友になっている事というのがある。

昔の恋人とは、まさに昔の"恋人"であって、ただのボーイフレンドとか、ほんの短い期間だけ付き合った人とか、恋愛までは発展しなかったけれど数回デートしたした人なんていうのは、この中には入らない。(なんて書くと、"恋多き女"みたいでわくわくしますね！でも実際は、大した人数じゃありません)

私が恋人と呼ぶのは、ある期間（平均2年）ほとんど毎日一緒に眠って、一緒に食事をした相手、20歳の、あるいは23歳の私の、可愛いところも憎らしいところも一番知っている男ということなのだ。ある意味で家族よりも親密で、どんな親友よりも理解し合っていて、頼りになる存在。

だから、たとえ情熱が冷めたとしても、そう簡単に"二度と会わない関係"にはなれないのだ。

もちろん、恋愛が終わってすぐは、しばらく会わない。それだけ真剣に付き合ったからこそ、終わった時はお互いとても傷ついているから。けれども、一時の冷却期間のあと、今度はとても素敵な友達として、再会し始める。ベッドの関係抜きで。(私は別れた男とは、絶対に寝ないことにしている。せっかく築いた素敵な友情をぶち壊してしまうのが恐いから)

昔の恋人は、うまくやれば、あなたの最高の男友達になり得るのだ、と私は自信を持って皆さんにおすすめしたい。恋人だった時よりも、「もっと私のことを愛して」という要求をしなくなった分、距離を置いて付き合えるし、いい格好をする必要もない。これほど、楽しく会話のできる関係が他にあるだろうか？

私は今、夫がいて、できれば若い愛人なんかいたらすっごく楽しいだろうなぁと思ったりもするけれど、一人の愛人がいる人生よりも、「昔の恋人」である男友達が3人いる人生の方を選びたい。

彼らとは1対1でよくお酒を飲みに行く。女のコの上手な口説き方を冗談まじりに教えてあげたり、お互いの仕事のことなんかを割合真剣に話したりする。落ち込んでいたり、スランプに陥っている時、どんな女友達よりも、私を発奮させてくれるのは、この「昔の恋人」である男友達なのだ。

こういう関係は、どちらかに（恋愛対象としての）未練があったら、成立しないだろうと思う。そう、私は彼らが大好きだし、それは間違いなく愛情の一種だろうけれど、かつてそうだった種類の愛とは全然違うのである。もちろん会う度に、やっぱりいい男だわ、と舌打ちをしながらも誇らしく感じるし、彼らもサービス精神で私を口説く振りもするけれど、でも、もう一度恋人同士になりたいとは、どちらも心の底からは思っていない。それは、私たちが完全燃焼してしまったから。燃え尽きてしまった二人には、もう火がつかないのである。お互いを尊重し、いたわり、いとおしむ、優しい愛情があるだけだ。

そして、中途半端な恋で終わった、数回のデートで終わった、要するに不完全燃焼で終わった男たちとは、なかなか友達になれない。なぜなら、二人の間には「やり残したことがある」から。そういう男とまた会い始めるということは、明らかにベッドの関係、あるいは情熱の再燃を期待しているからだと思う。少なくとも、私はそうだ。それが解かっているから、この手の相手とは会わなくなってしまう。友達になんか、とてもなれない。

『昔の恋人』である男友達の1人が昨日結婚した。私は夫にエスコートされて、披露パーティーに出席したのだった。

タキシード姿の昔の恋人を見て、とてもせつなくなってしまった。ともに無鉄砲な青春時代を過ごした彼が、あまりお金がなかったけれどしょっ中ディスコに行っては一緒に踊り、派手に喧嘩をし、泣いたり笑ったり、暖房のない部屋でぴったりとくっついて眠ったりしたあの彼が、パーティーの挨拶で涙ぐんでいるのを見た時、私の目も涙でいっぱいになったのだった。

私と彼とは最後にしっかりと握手をした。「これからもよろしくな」と彼は力強く言い、私は黙って微笑んだ。

フランソワーズ・サガンがこんなことを言っている。『友情』の要素が含まれない恋愛なんて味気ないものだ、と。

結局私は、情熱が冷めたあとも最高の友人として付き合えるほどの男だからこそ、本気で恋に落ちたのかもしれない。彼らとは、ずっと素敵な友達でいたいと思う。

マンボカーパラダイス

恐いクルマに気をつけろ

そろそろゴールデンウィークですね。また今年も大渋滞の高速道路で皆さんお楽しみください。大渋滞の中での楽しみ方は、昨年の6月号の此のコラムに詳しく書いてありますから、ひっぱり出して読んでね。

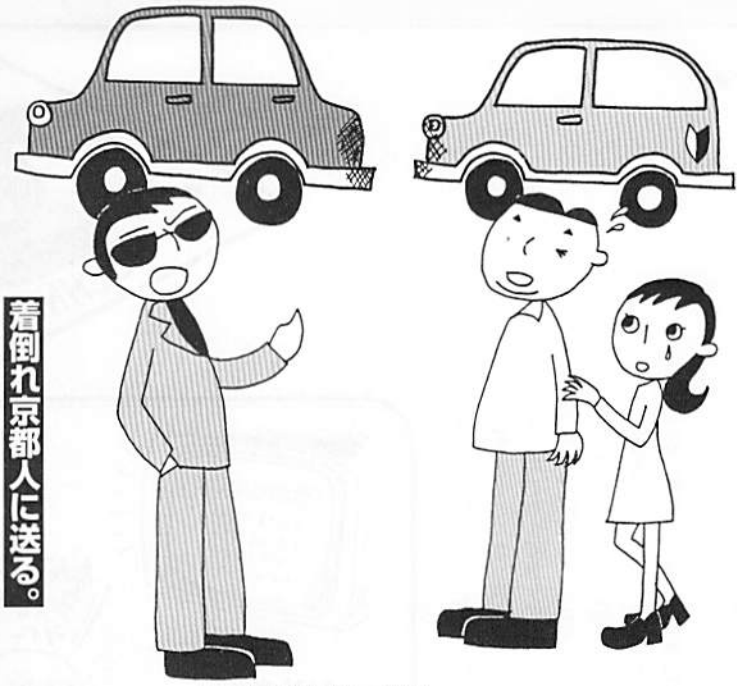
というわけで暖かくなってみんなでドライ軽自動車に乗っているようなオバサンはなぜか対象外です。いってみれば、ベンツじゃなくてマークⅡとか、セドリックとかを運転しているオバサンです。わかりますね。見た目にあまりに貧乏臭い人には、そうそうアタッテはきませんので念のため。あと新車に乗っている場合にも、擦り寄られます。車両保険はいってるぞー、なんていう感じのクルマはほとんどカモです。気をつけなければならないのは、運転がヘタクソな人ほどそういうないそうですから、この際いっそヤンキーになってしまってみてはいかがでしょう。万が一アタッテこられた場合には、その場でギャーギャー言われても、必ず警察へ連絡しましょう。オマエが悪いの

MARUOKA IZUHO

プロフィール 1965年生まれ。
同志社女子大学卒。（株）電通プロックス勤務を経て、現在コピーライター。広告のほかFMラジオ番組のシナリオや出演もこなす。著書に『ありふれた無邪気が罪になる』（PHP研究所）、『キスまで、待てない』（大和書房）など。

HAPPY DIVAS
HAP
ハッピーディーバーズ

着倒れ京都人に送る。ササイな情報 ⑫



イラスト：佐藤アモール陽子

YAMAMOTO PARADISE

セディショナリーズのTシャツとボンデージパンツで会場係員の制止を振り切って入り口に突進する奴、会場入り口で一人一人に余っているインビテーションカードがないかを聞いて回っているブロンドのモデル風。パリコレの会場として昨年秋にオープンしたルーブルの地下、カルーゼル・ド・ルーブルのショウ会場で最も異質な人種が集まるのがヴィヴィアン・ウエストウッドのコレクションである。

3月6日に行なわれた94ー95秋冬コレクションでは、同じ日の前の時間に隣の会場で行なわれたソニア・リキエルのショウにヴィヴィアンのかつてのパートナー、マルコム・マクラーレンが姿を見せたため、80年代からの彼女の熱狂的信者たちのボルテージは最高潮に達していた。ソニアのショウにはロバート・アルトマン監督が今パリで撮影している新作「プレタポルテ」へ出演するためキム・ベイジンガーも来ていたけれど、ヴィヴィアンのファンにとってはマルコム命。今シーズンは特に入場のチェックが厳しかったため、会場に入れず1回目のショウが終った客にインビテーションカードをもらって、カラーコピーで時間の箇所だけを直して何とか2回目のショウに潜り込もうとする奴まで現われ、会場ガードマンのピリピリ加減にこちらは圧倒されるしかなかった。

緊張のなか始まったショウは彼女のこの数シーズンのゴージャスラインがさらにエスカレート。アングロマニアをうたった前回93ー94年秋冬の流れで、クチュールテイストを18世紀後半に流行したバッスルスタイル（お尻の部分を盛り上げるためクッション風のものを入れてウエストに縛りつけるもの。日本の鹿鳴館スタイル。6月19日迄京都国立近代美術館で開催されている「モードのジャポニズム」展でも展示されている）とともに、たっぷり50分のコレクション。マリエが出てフィナーレかと思いきや、その後、さらに10点近く出てきて、カメラマンもカメラを片付けかけていたのをもう一度慌ててセットしていた。個人的にはカルーゼルの会場と違った昨秋冬のコレクションの方が作品自体のインパクトは強かったものの、今回はケイト・モスのトップレス姿、クリスティやカーラのお尻とスーパーモデルのナマ身を眼の前で見せていただいて、ヴィヴィアンの毒気にしっかり当てられてしまった。

コレクションで発表されたラインは、ゴールドラベルと呼ばれるハイプライスゾーンで、日本には数着しか入ってこないかもしれないが、実際に店頭で並ぶセカンドライン（ブルーラベル、レッドラベル）がどういったコレクションになるかはこの秋のお楽しみ。

ヴィヴィアンのコレクションを見たあとすぐにロンドンに飛んだので、残念ながら楽しみにしていたズーリー・ベーの1年ぶりのショウ、話題のジル&ロジェ（GR816）も見られなかったのだけれど、パリもロンドンも新人デザイナーが面白い。ズーリー・ベーがアトリエとして期間限定で借りているパリの病院の跡や、電気の来ていないショウルームで自分の作品を解説してくれるロンドンのアレキサンダー・マックイーン、オーエン・ガスタなどのデザイナーと話していると、日本のデザイナー達はやっぱり恵まれた環境にあると、思わざるを得ない。ヴィヴィアンとはまた違ったアティテュードで洋服のデザインに向かう彼らを見ていると、日本に入ってくるパリコレのゴージャスな情報も、バブル時代の反省がちっとも見えなくて、少し悲しくなる。

プロフィール　1959年京都生まれ。流行通信社・WWDジャパン編集部デスク。東京中心のファッション情報のなかで関西に留まり、10年以上にわたり世界の服飾産業を見続けている。91年より大阪コレクションの選考委員として、海外、新人のデザイナーのショーもサポート。

NODA TATSUYA

ブに出かけるようなことも多くなってくるこの季節、冬眠から覚めたように湧き出てくるのが、いわゆるアタリ屋です。いまどきそんな、と思われるでしょうが、これがどうして結構いるのですよ。こういう私も、過去に友人の運転するクルマに乗っている際、とんでもない目にあいました。こういう商売？の人たちは、狙いを定めるともう絶対にアタッテきますから、とにかく狙われないよう、アタッテもらわれないように運転するしかありません。まず第一に初心者マークつきの皆さん。もう大学合格したとか、新社会人になったとかでウキウキ気分の人たちが一番狙われています。何かそばによるだけでフレッシュな香りがする人っているでしょう。そういう人です。それから、小さい子供を一緒に乗せているママさん。もうこの場合、人たちに気に入られるということです。やたらと車間をあけて右側をノロノロ走っている人や、シートをおもいっきり前にスライドしてハンドルを抱きかかえるようにして運転しているような人って見かけるでしょう。まあだいたいがオバサンなんですが、中には気の弱そうな感じのOLとか、学生さんみたいな人がいるわけです。こいつ運転ヘタね、と思われたらもうおしまいです。最近は手がこんできて2台3台で、つるんで邪魔してきたり、思いもよらない手段でアタッテくるそうですから、気をつけてくださいネ。元からボコボコのクルマなんかに乗っている人は、アタッテこないようですから、ピカピカの新車に乗っている人は少しばかり自分でボコボコにしてみてはいかがでしょうか。意外にもヤンキーが乗っているようなクルマも狙われに警察呼んでもイイってのかー、なんて言われても警察呼んだ方がおりこうさんです。わかったかな。

【プロフィール】元東京パノラママンボボーイズのリーダー。富士重工業デザインセンターで、カーデザイナーとしても活躍していた。初代レガシーツーリングワゴン、アルシオーネSVXなどのデザインを手掛ける。4月から始まった新番組、土曜夜7時からの「テレビの王様」（TBS系）でもマンボ名コラムニストとして活躍中。ソリマチアキラといっしょの東京ラテンムードデラックスも全国ツアーが決定！京都にも来るぞ。